

私は上手に喋ることができない。それは物心ついた時から分かっていた。

「吃音症」とは、話し言葉が滑らかに出不い言語障がいの一つであり、別名「どもり」とも言われる。「か、か、か、からす」のように、音を繰り返す「連発」、「かーーらす」のように音を引き伸ばす「伸発」、「・・・からす」のように、初めの言葉が出ない「難発」の主に三つが存在する。また、吃音症は大きく「発達性吃音」と「獲得性吃音」の二つに分類され、約九割が前者である。発達性吃音の特徴として、幼児が言葉を発する時期に起こりやすく、成長するにつれて治る場合が多いが、ごくわずかに症状が固定化される人もいる。獲得性吃音は、神経学的疾患や脳損傷、心的なストレスや外傷体験が影響して、十代後半以降に発症することを指す。

私は連発と難発を持つ発達性吃音者である。

小学四年生の時、運動会でクラスのリーダーをしていた私はたった一言の掛け声「赤組行くぞ」が言えなかった。五年生の時、日直だった私はたった一言の号令「朝の挨拶をしましょう。おはようございます」が言えなかった。六年生の時、朝の出欠確認で私はたった一言の返事「はい、元気です」が言えなかった。中学一年生の時、ホームルームで私はたった一言の挨拶「今から朝の会を始めます」が言えなかった。二年生の時、国語の授業で私はたった一言の教科書のフレーズ「アイスプラネット」が言えなかった。三年生の時、受験の面接練習で私はたった一言の言葉「失礼します。よろしく願います。」が言えなかった。

言えない度に、友達にバカにされた。「せなちゃんの喋り方変だね」、「せなちゃんと一緒にいたら感染する。逃げろ。」たくさん笑われて、ハブられた。国語の授業で教科書の音読を当てられるのが怖くて、トイレに逃げた。言えない自分を想像して、聞こえないはずの笑い声が聞こえた。友達の名前が言えなくて、肩を叩くか、「ねえ」と呼びかけることで誤魔化した。授業もまともに受けられない、友達の名前も呼べない。小学生の時、中学生になったら治ると思っていた。中学生の時、高校生になったら治ると思っていた。だけどそんなことはなかった。確かに成長とともに症状は断然軽くなった。吃音症であることを初対面の人に気づかれないくらいである。しかし、大勢の人の前で話す時、教科書を読む時、決まったセリフを言う時、自分が自分でないかのように言葉が詰まって出てこなくなる。だから自分の言葉に変換したり、いっそのこと笑いに変えてみたり。「普通」に思われたい一心で。毎日必死である。

上手く喋れないことがそんなに悪いことなのか。スラスラ言えないと人間じゃないのか。必死に生き続けて十七年。私はそう考えている社会や世界が嫌いだ。これは吃音症だ

けに言えることではない。目や耳が不自由な人、歩けない人、走れない人、髪の毛がない人、声を出すことができない人、人間誰しも欠けている部分はあるだろう。それが人より少し目立つだけで、こんなにもバカにされ、避けられて、弱い者扱いされなければならないのか。特別視される必要があるのだろうか。これはできて当然のことだ、これが普通だと、こちらが勝手に決めた「普通」という固定概念を相手に押し付けて判断し、排除してよいのだろうか。人それぞれ、顔も名前も性格も何もかも違っているのは、誰かを排除するための言い訳なのだろうか。所詮、私たちは皆同じ人間である。この平等な世界に生を受けた、たった一人の人間である。同じ生き物であっても、一人一人違うことは当たり前なのに、それを皆分かっているはずなのに、未だ差別が後を絶えないことに、本当に心が痛む。

「全ての人々が平等に生きる世界」を口だけではなく社会で実現させるには、どうしたらよいただろうか。私は「対話」が最も大事だと思う。私は中学生の時に、吃音症について理解を深めてもらおうと、クラスのみんなの前で説明をした。すると、みんな分かってくれた。もう誰もバカにしてくることはなかった。もっと早く伝えていればと思った。人それぞれ「普通」のあり方は違う。もちろん説明しなくとも、始めから違いを認め合うことが最も重要なのだろうが、あなたの「普通」が、みんなの「普通」ではないんだよ、と教えるためにもまずは自分の言葉で伝える。「対話」を諦めないことが大切だと私は考える。

ある先生に言われたことがある。人間関係の悩みを相談した時のことだ。「どうして私たち人間には『言葉』という武器があるのに、それを使おうとしないの？言葉にして伝えない限り、あなたの思いは誰にも伝わらないよ。せっかく『言葉』を持っているのに使わないなんてもったいないわ」と。

これから生きていく中で、私はいろいろな人と出会うだろう。その時に、「普通じゃない」と、こちらが勝手に決めつけた「普通」の価値観で判断し排除するのか。はたまた多様性と考え、対話を通して共に生きていく姿勢を崩さないのか。私は後者でありたい。自分の吃音症という体験から学んだことを生きる糧とし、「全ての人々が平等に生きる世界」を実現する先駆を切っていきたい。